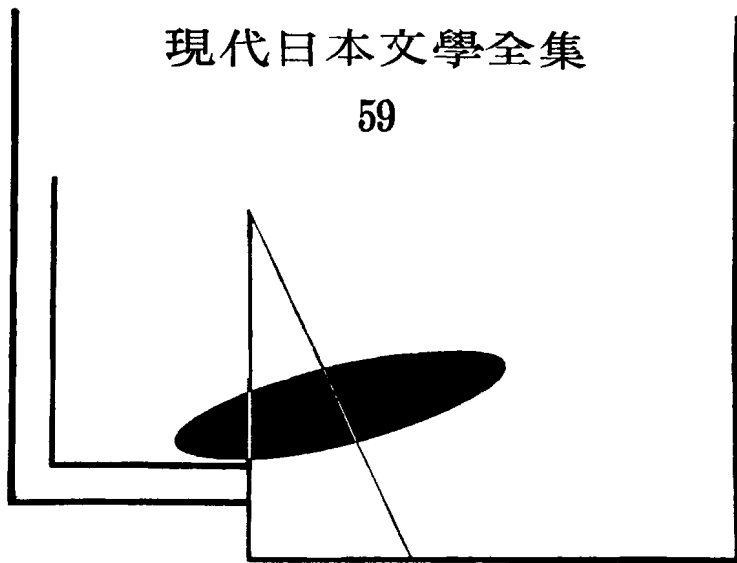


牛月伸江
樗抱長
山村上田
高島片生
集

現代日本文學全集

59



筑摩書房版

高島片生
山村上田
樗抱長
牛月伸江 集

昭和三十三年六月十五日 印刷
昭和三十三年六月二十日 發行

著者

高島片生
山村上田
樗抱長
牛月伸江

發行者

古田 晁
東京都千代田區神田小川町二ノ八

印刷者

山田 一雄
東京都青梅市根ヶ布三八五

發行所

筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八

〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

印刷 株式會社 精興社
製本 株式會社 鈴木製本所

高山樗牛集 目次

瀧口入道……………セ

わがそでの記……………三

明治の小説……………四

我邦現今の文藝界に於ける批評家

の本務……………五

文明批評家としての文學者……………六

島村抱月集 目次

運命の丘……………一〇

清盛と佛御前……………一七

囚はれたる文藝……………二三

「破戒」を評す……………二七

ルイ王家の夢の跡……………三三

平家雜感……………六

姉崎嘲風に與ふる書……………七

現代文章私見……………八

美的生活を論ず……………九

日蓮上人とは如何なる人ぞ……………九

『蒲團』を評す……………四

文藝上の自然主義……………五

自然主義の價值……………六

藝術と實生活の界に横はる一線……………七

實行的人生と藝術的人生……………七

藝術は何の爲めに存在するか……………二七

序に代へて人生觀上の自然主義を論ず……………二八

片上伸集 目次

未解決の人生と自然主義……………三〇

自己の爲めの文學……………三二

アーサー・シモンズ論……………三六

イエーツ論……………三九

緊張充實を欲する文學……………四二

近代文學に對する疑ひ……………四七

階級藝術の問題……………五三

「否定」の文學……………五六

生田長江集 目次

自然主義論……………六〇

懷疑と告白……………六四

平凡人の反抗……………七三

現代日本文學の問題……………七三

現實觀の成長……………七七

内在批評以上のもの……………八〇

文學の讀者の問題……………八五

現實觀の動搖……………八五

文學方法論の問題……………八九

夏目漱石氏を論ず……………九〇

安倍能成君へ……………	二五	認識不足の美學者二人……………	三三
「二の道」に就いて阿部次郎君に		文壇の新時代に與ふ……………	三九
與ふる書……………	三五	「近代」派と「超近代」派との戦……………	三六
自然主義前派の跳梁……………	三〇	新貞操論……………	三二
最近思潮の一逆轉……………	三五	重要な問題及び一層重要な問題に	
蟲のいい「人類」その他……………	三八	就いて……………	三五
東洋人の時代が来る……………	三四	左傾者丈けが勇敢であるか……………	三五
高山樗牛論(岡崎義恵)……………	三五	解説……………	四六
島村抱月論(川副國基)……………	三七	年譜……………	四三
過渡時代の道標(宮本顯治)……………	三七		
先師を憶ふ(佐藤春夫)……………	四〇		

装幀
恩地孝四郎

高山樗牛集

樗牛

吾人は長く現代を

超越せざるべからず

瀧口入道

第一

やがて來む壽永の秋の哀れ、治承の春の樂みに知る由もなく、六歳の後に昔の夢を辿りて、直衣の袖を絞りし人々には、今宵の歡會も中々に忘られぬ思殿の涙なるべし。

驕る平家を盛り、櫻に比べてか、散りての後の哀れは思はず、入道相國が花見の宴とて、六十餘州の春を一夕の臺に集めし都西八條の邸宅君ならでは人にして人に非ずと唱はれし一門の公達、宗徒の人々は言ふも更なり、華胄攝録の子弟の、苟も武門の蔭を覆ひに當世の榮華に誇らんずる輩は、今日を晴にと裝飾ひて、綺羅星の如く連りたる有様、燦然として眩き許り、さしも善美を盡せる虹梁鴛瓦の、初も影薄げにぞ見えし。あはれ此程までは殿上の交をだに嫌はれし人の子、家の族、今は紫緋紋綾に禁色を狼にして、をさく傍若無人の振舞あるを見て、眉を蹙むる人だに絶えてなく、夫れさへあるに衣袍の紋色、烏帽子のため様まで萬六波羅様をまねびて時知り顔なる、世は愈々平家の世と覺えたり。

見渡せば正面に唐錦の茵を敷ける上に、沈香の脇息に身を持たせ、解脫同相の三衣の下に天魔波旬の慾情を去りやらず、一門の榮華を三世の命とせる入道清盛、さても鷹揚に坐せる其の傍には、嬌子小松の内大臣重盛卿、次男中納言宗盛、三位中将知盛を初めとして、同族の公卿十餘人、殿上三十餘人、其他、衛府諸司數十人、平家の一族を擧げて世には又人なくぞ見られける。時の帝の中宮、後に建禮門院と申せしは、入道が第四の女なりしかば、此夜の盛宴に漏れ給はず、冊ける女房曹司は皆々晴の衣裳に綺羅を競ひ、六宮の粉黛何れ劣らざる粧を凝らして、花にはあらで得ならぬ匂ひ、そよ吹く風毎に素袍の袖を掠むれば、末座に並み居る若侍等の亂れもせぬ衣髪をつくろふも可笑し。時は是れ陽春三月の暮、青海の簾高く捲き上げて、前に廣庭を眺むる大弘間、咲きも残らず散りも初めず、欄干近く雲かと紛ふ滿朶の櫻、今を盛りに匂ふ様に、月さへ懸りて夢の如き圓なる影、臍に照り渡りて、滿庭の風色碧紗に包まれたらん如く、一刻千金も當ならず。内には遠侍のあなたより、遙か對屋に沿うて樓上樓下を照せる銀燭の光、錦繡の戸帳、龍鬢の板疊に輝きて、さしも廣大なる西八條の館に光到らぬ隈もなし。あはれ昔にありきてふ、金谷園裏の春の夕も、よも是れには過ぎじとぞ思はれける。

饗宴の盛大善美を盡せることは言ふも愚なり、庭前には錦の幔幕を張りて舞臺を設け、管絃鼓箏の響は興を助けて短き春の夜の闌くるを知らず、豫て召し置かれたる白拍子の舞もはや終りし頃ほひ、さと帛を裂くが如き四絃一撥の琴の音に連れて、繁絃急管のしらべ洋々として響き互れば、堂上堂下俄に動搖めきて、「あれこそは隠れもなき四位の少將殿よ」、「して此方なる壯年は、「あれこそは小松殿の御内に花と歌はれし重盛殿よ」など、女房共の罵り合ふ聲々に、人々等しく樂屋の方を振向けば、右の方より薄紅の素袍に右の袖を肩脱ぎ、螺鈿の細太刀に紺地の水の紋の平緒を下げ、白綾の水干、櫻明黃の衣に山吹色の下襲、背には胡籙を解きて老掛を懸け、露のまゝなる櫻かざして立たれたる四位の少將維盛卿。御年辛く二十二、青絲の髪、紅玉の膚、平門第一の美男とて、かざす櫻も色失せて、何れを花、何れを人と分たざりけり。左の方よりは足助の二郎重景とて、小松殿恩顧の侍なるが、維盛卿より弱きこと二歳にて、今年方に二十の壯年、上下同じ素絹の水干の下に燃ゆるが如き緋の下袍を見せ、厚塗の立烏帽子に平塵の細輪なるを佩き、袂豊に舞ひ出でたる有様、宛然一幅の畫圖とも見るべかりけり。二人共に何れ劣らぬ優美の姿、適怨清和、曲に隨つて一絲も亂れぬ歩武の節、首尾能く青海波をぞ舞ひ納めける。滿座の人々感に堪へざるはなく、中宮よりは殊に女房を使に纏頭の御衣を懸けられければ、二人は面目身に餘りて退り出でぬ。跡にて口善悪なき女房共は、少將殿こそ深山木の中の楊梅、足助殿こそ枯野の小松、何れ花も實も有る武士よと言ひ合へりける。知る

も知らぬも羨まぬはなきに、父なる卿の眼前に此を見て如何許り嬉しく思ひ給ふらんと、人々上座の方を打ち見やれば、入道相國の然も喜ばしげなる笑顔に引換へて、小松殿は差し俯きて人に面を見らるゝを懶げに見え給ふぞ訝しき。

第二

西八條殿の搖ぐ計りの喝采を跡にして、維盛・重景の退り出でし後に一個の少女こそ顯はれたれ。是ぞ此夜の舞の納めと聞えければ、人酔を凝らして之を見れば、年齒は十六七、精好の緋の袴ふみしだき、柳裏の五衣打ち重ね、丈にも餘る縁の黒髪後にゆりかけたる様は、舞子白拍子の媚態あるには似て、閑雅に蕩長けて見えにける。一曲舞ひ納む春鶯囀、細きは珊瑚を碎く一兩の曲、風に靡けるさゝがにの絲輕く、太きは瀬津瀬の鳴り渡る千萬の聲、落葉の蔭に村雨の響重し。綾羅の袂ゆたかに飄るは花に休める女蝶の翼か、蓮歩の節急なるは蜻蛉の水に點ずるに似たり。折らば落ちん萩の露、拾はば消えん玉篠の、あはれにも亦婉やかなる其の姿見る人憐然として酔へるが如く、布衣に立烏帽子せる若殿原は、あはれ何處の誰が女子ぞ、花薫り月霞む宵の手枕に、君が夢路に入らん人こそ世にも果報なる人なれなど、袖袂引合ひてのしり合へるぞ笑止なる。

榮華の夢に昔を忘れ、細太刀の輕さに風雅の銘を打ちたる六波羅武士の賜をば一指の舞に溶したる彼の少女の、満座の秋波に送られて退り

出でしを此夜の宴の終として、人々思ひ思ひに退出し、中宮もやがて還御あり。跡には春の夜の朧月、残り惜げに欄干の邊に蛤躰ふも長閑けしや。

此夜、三條大路を左に、御所の裏手の御溝端を辿り行く骨格逞しき一個の武士あり。月を負ひて其の顔は定かならねども、立烏帽子に稜長の布衣を着け、蛭卷の太刀の柄太きを横へたる夜目に爽かなる出立は、何れ六波羅わたりの内人と知られたり。御溝を挟んで今を盛りなる櫻の色に見て欲しげなるに目もかけず、物思はしげに小手又きて、少しくやなだれたる頭の重げに見ゆるは、太息吐く爲にやあらん。扱ても春の夜の月花に換へて何の哀れぞ。西八條の御宴より歸り途なる侍の一群二群、舞の評など樂げに誰憚らず罵り合ひて、果は高笑ひして打ち興ずるを、件の侍は折々耳側で、時に冷やかに打笑む様、仔細ありげなり。中宮の御所をはや過ぎて、垣越の松影月を漏らさで墨の如く暗き邊に至りて、不圖首を擧げて暫し四逸を眺めしが、俄に心付きし如く早足に元來し道に戻りける。西八條より還御せられたる中宮の御輿、今しも宮門を入りしを見、最と本意なげに跡見送りて門前に佇立みける。後れ馳せの老女訝しげに己れが容子を打ち睨り居るに心付き、急ぎ立去らんとせしが、何思ひけん、つと振向て、件の老女を呼止めぬ。

何の御用と問はれて稍躊躇ひしが、「今宵の御宴の終に春鶯囀を舞はれし女子は、何れ中

宮の御内ならんと見受けしが、名は何と言はるるや」。老女は男の容姿を暫し眺め居たりしが、微笑みながら、「扱も笑止の事も有るものかな、西八條を出づる時、色清げなる人の妾を捉へて同じ事を問はれしが、あれは横笛として近き頃御室の郷より曹司に見えし者なれば、知る人なきも理にこそ、御身は名を聞いて何にし給ふ」。男はハツと顔赤らめて、「勝れて舞の上手なれば」。答ふる言葉聞きも了らで、老女はホ、と意味ありげなる笑を残して門内に走り入りぬ。「横笛、横笛」、件の武士は幾度か獨語ちながら、徐に元來し方に歸り行きぬ。霞の底に響く法性寺の鐘の聲、初更を告ぐる頃にやあらん。御溝の那方に長く曳ける我影に駭きて、傾く月を見返る男、眉太く鼻隆く、一見瀟々しき勇士の相貌、月に笑めるか、花に咲ふか、あはれ臉の邊に一掬の微笑を帯びぬ。

第三

當時小松殿の侍に齋藤瀧口時頼と云ふ武士ありけり。父は左衛門茂頼とて、齡古稀に餘れる老武者にて、壯年の頃より數ヶ所の戰場にて類稀なる手柄を顯はししが、今は年老たれば其子の行末を頼りに殘年を樂みける。小松殿は其功を賞で給ひ、時頼を瀧口の侍に取立て、數多の侍の中に殊に恩顧を給はりける。

時頼是の時年二十三、性闊達にして身の丈六尺に近く、筋骨飽くまで逞しく、早く母に別れ、武骨一邊の父の膝下に養はれしかば、朝夕耳に

せしものは名ある武士が先陣拔懸けの譽ある功名談にあらざれば、弓箭甲冑の故實、譽垂れし幼時より劍の光、弦の響の裡に人と爲りて、美淨きたる世の雜事は刀の柄の塵程も知らず、美田の源次が堀川の功名に現を抜かして赤檉の木太刀を振り舞はせし十二三の昔より、空脇撫でて長劍の輕きを啣つ二十三年の春の今日まで、世に畏ろしきものを見ず、出入る息を除きては、六尺の體、何處を膽と分つべくも見せず、實に保平の昔を其儘の六波羅武士の模型なりけり。然れば小松殿も時頼を末頼母しきものと思ひ、行末には御子維盛卿の附人になさばやと常々目を懸けられ、左衛門が伺候の折々に「茂頼、其方は善き斃を持ちて仕合者ぞ」と仰せらるゝを、七十の老父、曲りし背も反らん計りにぞ嬉しがりける。

時は治承の春、世は平家の盛、そも天喜、康平以來九十年の春秋、都も鄙も打ち靡きし源氏の白旗も、保元、平治の二度の戰を都の名残に、脆くも武門の哀れを東海の隅に留めしより、六十餘州に到らぬ隈なき平家の權勢、驕るもの久しからずとは驕れるもの如何で知るべき。養和の秋、富士河の水禽も、まだ一年の來ぬ夢なれば、一門の公卿殿上人は言はずもあれ、上下の武士何時しか文弱の流に染みて、嘗て丈夫の譽に見せし向ふ疵も、いつの間にか水髮の陰に掩はれて、重きを誇りし圓打の野太刀も、何時しか銀造の細鞆に反を打たせ、清らなる布衣の下に練貫の袖さへ見ゆるに、弓矢持つべき手に管絃の調とは、言ふももうたてき事なりけり。時頼世の有様を觀て熟く思ふ様、扱も心得ぬ六波羅武士が舉動かな、父なる人、祖父なる人は、昔知らぬ若殿原に行末短き榮耀の夢を食らせんとて其の膏血はよも濺がじ。萬一事有るの曉には、絲竹に鍛へし腕、白金造の打物は何程の用に立つべき。射向の袖を却て覆ひに捨鞭のみ烈しく打ちて、笑ひを敵に残すは眼のあたり見るが如し。君の御馬前に天晴勇士の名を昭して討死すべき武士が、何處に二つの命ありて、歌舞優樂の遊に荒める所存の程こそ知られぬ。——弓矢の外には武士の住むべき世ありとも思はぬ一徹の時頼には、兎角概はしく、苦々しき事のみ耳目に觸れて、平和の世の中面白からず、あはれ何處にても一戰の起れかし、いでや二十餘年の風雨に鍛へし我が技倆を顯はして、日頃我れを武骨物と嘲りし優長武士に一泡吹かせんずと思ひけり。衆人酔へる中に獨り醒むる者は容れられず、斯かる氣質なれば時頼は自から憐輩に疎せられ、瀧口時頼とは武骨者の異名よなど嘲り合ひて、時流外れに粗大なる布衣を着て、鐵卷の丸鞆を鷗尻に横へし後姿を、蔭にて指し笑ふ者も少からざりし。

西八條の花見の宴に時頼も連りけり。其夜更闌けて家に歸り、其の翌朝は常に似ず朝日影窓に差込む頃やうやく臥床を出でしが、顔の色少しく着味を帯びたり、終夜眠らざりしにや。

此夜、御所の溝端に人跡絶えしころ、中宮の御殿の前に月を負ひて歩むは、紛ふ方なく先の夜に老女を捉へて横笛が名を尋ねし武士なり。物思はしげに御門の邊を行きつ戻りつ、月の光に振向ける顔見れば、まさしく齋藤瀧口時頼なりけり。

第四

物の哀れも是れよりぞ知る、戀ほど世に怪しきものはあらじ。稽古の窓に向つて三諦止觀の月を樂める身も、一朝折りかへす花染の香に幾年の行業を捨てし人、百夜の榻の端書につれなき君を怨みわびて、亂れ苦き忍草の露と消えにし人、さては相見ての後のただちの短きに、戀ひ悲みし永の月日を恨みて三衣一鉢に空なる情を觀ぜし人、惟へば孰れか戀の奴に非ざるべき。戀や、秋萩の葉末に置ける露のごと、空なれども、中に寫せる月影は圓なる望とも見られぬべく、今の憂身をつらしと啣てども、戀せぬ前の越方は何を樂みに暮らしけんと思へば、涙は此身の命なりけり。夕旦の鐘の聲も餘所ならぬ哀れに響く今日は、過ぎし春秋の今更心なきに驚かれ、鳥の聲、蟲の音にも心何となう動きて、我にもあらで情の外に行末もなし。戀せる今を迷と觀れば、悟れる昔の慕ふべくも思はれず、悟れる今を戀と觀れば、昔の迷こそ中々に樂しけれ。戀ほど世に訝しきものはあらじ。そも人、何を望み何を目的に渡りぐるしき戀路を辿るぞ。我も自ら知らず、只々靡げながら夢と現の境を

歩む身に、ましてや何れを戀の始終と思ひ分た
んや。そも戀てふもの、何こより來り何こそさ
して去る、人の心の限は映すべき鏡なければ何
れ思案の外なんめり。

いかなれば齋藤瀧口、今更武骨者の銘打つた
る鐵卷をよそにし、負ふにやさしき横笛の名に
笑める。いかなれば時頼、常にもあらで夜を冒
して中宮の御所には忍べる。吁々いつしか戀の
淵に落ちけるなり。

西八條の花見の席に、中宮の曹司横笛を一目
見て時頼は、世には斯かる氣高き美しき女子も
有るもの哉と心竊に駭きしが、雲を遏め雲を廻
す妙なる舞の手振を見ても行くうち、胸怪しう
轟き、心何となく安からざる如く、二十三年の
今まで絶えて覺なき異様の感情雲の如く湧き出
でて、例へば渚を閉ぢし池の水の春風に浴けた
らんが如く、若しくは満身の力をはりつめし手
足の節々一時に緩みしが如く、茫然として行衛
も知らぬ通路を我ながら踏み迷へる思して、果
は舞終り樂收まりしにも心付かず、臆て席を退
り出でて何處ともなく出で行きしが、あはれ横
笛とは時頼其夜初めて覺えし女子の名なりけり。
日來快闊にして物に鬱する事などの夢にもな
かりし時頼の氣風何時しか變りて、憂はしげに
思ひ煩ふ朝夕の様唯ならず、紅色を帯びしつや
つやしき頬の色少しく蒼ざめて、常にも似て物
言ふ事も稀になり、太息の數のみぞ唯々増さ
ける。果は濡羽の厚鬢に水櫛當て、管長の大束
に今様の大紋の布衣は平生の氣象に似もやらす

と、時頼を知れる人、訝しく思はぬはなかりけ
り。

第五

打つて變りし瀧口が今日此頃の有様に、あれ
見よ、當世嫌ひの武骨者も一度は折らねばなら
ぬ我慢なるに、笑止や日頃吾等を尻目に懸けて
輕薄武士と言はぬ計りの顔、今更何處に下げて
吾等に對ひ得るなど、後指さして嘲り笑ふもの
あれども、瀧口少しも意に介せざるが如く、應
對等は常の如く振舞ひけり。されど自慢の頬鬚
搔撫する隙もなく、青蕪の跡絶えず鮮かにして、
萌黄の狩衣に摺皮の藁草履など、よろづ派手や
かなる出立は人目に夫と紛ふべくもあらず。顔
容さへ稍々寔れて、起居も懶きがごとく見ゆれ
ども、人に向つて氣色の勝れざるを啣ちし事も
なく、偶々病などなきやと問ふ人あれば、却つ
て意外の面地して、常にも増して健かなりと答
へけり。

皆是れ戀の業なりとは、哀れや時頼未だ夢に
も心づかず、我ともなく人ともあらで只々思ひ
煩へるのみ。思ひ煩へる事さへも心自ら知らず、
例へば夢の中に伏床を抜け出でて終夜山の嶺、
水の涯を迷ひつくしたらん人こそ、さながら瀧
口が今の有様に似たりとも見るべけれ。

人にも我にも行衛知れざる戀の夢路をば、瀧
口何處のはてまで辿りけん、夕とも言はず、曉
とも言はず、屋敷を出でて行先は己れならで知
る人もなく、只々門出の勢ひに引きかへて、戻

足の打ち蕭れたる様、さすがに遠路の勞とも思
はれず。一月餘も過ぎて其年の春も暮れ、青葉
の影に時鳥の初聲聞く夏の初めとなりたれども
かゝる有様の俊まる色だに見えず、はては十幾
年の間、朝夕樂みし弓馬の稽古さへ自ら怠り勝
になりて、胴丸に積もる埃の堆きに目もかけず、
名に負へる鐵卷は高く長押に掛けられて、螺鈿
の櫻を散らせる黒鞆に摺鮫の鞆巻指し添へたる
立姿は、若し我ならざりせば一月前の時頼、唾
も吐きかねざる華奢の風俗なりし。

されば變り果てし容姿に慣れて、笑ひ譏る人
も漸く少くなりし頃、蟬聲喧しき夏の暮にも
なりけん。瀧口が顔愈々やつれ、頬肉は目立つ
までに落ちて眉のみ秀で、凄きほど色蒼白みて
濃かなる雙の鬢のみぞ愈々其の澤を増しける。
氣向かねばとて、病と稱して小松殿が熊野參籠
の伴にも立たず、動もすれば、己が室に閉籠り
て、夜更くるまで寝もやらず、日頃は絶えて用
なき机に向ひ、一穗の燈挑げて怪しげなる薄
色の折紙紙べ擴げ、命毛の細々と認むる小筆の
運び絶間なく、巻いてはかへす思案の胸に、果
は太息と共に封じ納むる文の數々、燈の光に宛
名を見れば、薄墨の色の哀れを籠めて、何時の
間に習ひけん、貫之流の流れ文字に「横笛さ
ま」。

世に艶かしき文てふものを初めて我が思ふ人
に送りし時は、心のみを頼みに安からぬ日を覺
束なくも暮らせしが、籬に觸るゝ夕風のそよと
の頼だになし。前もなき只の一度に人の誠のい

かで知らるべきと、更に心を籠めて寄する言の葉も亦仇し矢の返す響もなし。心せはしき三度五度、答なきほど迷ひは愈々深み、氣は愈々狂ひ、十度、二十度、哀れ六尺の丈夫が二つなき魂をこめし千束なす文は、底なき谷に投げたらん礫の如く、只の一度の返り言もなく、天の戸渡る握の葉に思ふこと書く頃も過ぎ、何時しか秋風の哀れを送る夕まぐれ、露を命の蟲の音の葉末にすだく聲悲し。

第六

思へば我しらで戀路の闇に迷ひし瀧口こそ哀れなれ。鳥部野の煙絶ゆる時なく、仇し野の露置くにひまなき、まゝならぬ世の習はしに漏るる我とは思はねども、相見での刹那に百年の契をこむる頼もしき例なきにもあらぬ世の中に、

いかなれば我のみは、天の羽衣撫で盡すらんほど永き悲しみに、只、一時の望みだに得協はざる。思へば無情の横笛や、過ぎにし春のこのかた、書き進ねたる百千の文に、今は我には言残せる誠もなし、良しあればとて此上短き言の葉に、胸にさへ餘る長き思を寄せん術やある。情なの横笛や、よしや送りし文は拙くとも、變らぬ赤心は此の春秋の永きにても知れ。一夜の松風に夢さめて、思寂しき衾の中に、我ありし事、薄が末の露程も思ひ出ださんには、など一言の哀れを返さぬ事やあるべき。思へば、心なの横笛や。

然はさりながら、他し人の心、我が誠もて規

るべきに非ず。路傍の柳は折る人の心に任せ、野路の花は摘む平常ならず、數多き女房曹司の中に、いはば萍の浮世の風に任する一女子の身、今日は何れの汀に留まりて、明日は何處の岸に吹かれやせん。千束なす我が文は讀みも了らで捨てやられ、さふ秋風に桐一葉の哀れを残さざらんも知れず。況てや、あでやかなる彼れが顔は、浮きたる色を愛づる世の中に、そも幾その人を惱しけん。かの宵にすら、かの老女を捉へて色清げなる人の、嫉ましや、早や彼が名を尋ねしとさへ言へば、思ひを寄するもの我のみにてはなかりけり。よしや他にはあらぬ赤心を寄するとも、風や何處と聞き流さん。浮きたる都の艶女に二つなき心盡しのかず、は我身ながら恥かじや、ア、心なき人に心して我のみ迷ひし愚さよ。

待てしばし、然るにても立波荒き大海の下にも、人知らぬ真珠の光あり、外には見えぬ木影にも情の露の宿する例、まゝならぬ世の習はしは、善きにつけ、悪しきにつけ、人毎に他には測られぬ憂はあるものぞかし。あはれ後とも言はず今日の今、我が此思ひを其儘に、いづれいかなる由ありて、我が思ふ人の悲しみ居らざる事を誰か知るや。想へば、那の氣高き臍つけたる横笛を萍の浮きたる艶女とは僻める我が心の誤ならんも知れず。さなり、我が心の誤ならんも知れず。鳴く蟬よりも鳴かぬ螢の身を焦すもあるに、聲なき哀れの深さに較ぶれば、仇浪立てる此胸の淺瀬は物の數ならず。そもや心なき

草も春に遇へば笑ひ、情なき蟲も秋に感ずれば鳴く。血にこそ染まね、千束なす紅葉重の燃ゆる計りの我が思ひに、薄墨の跡だに得還さぬ人の心の有耶無耶は、誰か測り、誰か知る。然なり、情なしと見、心なしと思ひしは、僻める我身の誤なりけり。然るにても――

瀧口の胸は麻の如く亂れ、とつおいつ、或は恨み、或は疑ひ、或は感ひ、或は慰め、去りては來り、往きどもは還り、念々不斷の妄想、流は千々に異れども、落行く末はいづれ同じ戀慕の淵。迷の羈絆目に見えねば、勇士の刃も切らんに術なく、あはれや、鬼も挫がんとす六波羅一の剛の者、何時の間にか戀の奴となりすまじぬ。一夜時頼、更闕けて尙ほ眠りもせず、意中の幻影を追ひながら、爲す事もなく茫然として机に憑り居しが、越し方、行末の事、端なく胸に浮び、今の我身の有様に引き比べて、思はず深々と太息つきしが、何思ひけん、一聲高く胸を叩いて躍り上り、「嗚呼、過てり」。

第七

歌物語に何の癡言と聞き流せし戀てふ魔に、さては吾れ疾より魅せられしかと、初めて悟りし今の刹那に、瀧口が心は如何なりしぞ。「嗚呼過てり」とは何より先に口を衝いて覺えず出でし意料無限の一語、襟元に雪水を浴びし如く、六尺の總身ぶる／＼と震ひ上りて、胸轟き、息せはしく、「む、」とばかりに暫時は空を睨んで無言の體。やがて眼を閉ぢてつくづく過越方

を想ひ返せば、衰れにもつらかりし思ひの数々、さながら世を隔てたらん如く、今更明かき暮らせし朝夕の如何にしてと驚かれぬる計り。夢かと思へば、現世身の陽炎の影とも消えやらす、現かと思へば、夢よりも尙ほ淡き此の春秋の経過、例へば永の病に本性を失ひし人の、やうやく我に還りしが如く、瀧口は只々恍惚として呆るゝばかりなり。

「嗚呼過てり、弓矢の家に生まれし身の、天晴功名手柄して、勇士の譽を後世に残すこそ此世に於ける本懐なれ。何事ぞ、眞の武士の昏頭に上ばすも忌はしき一女子の色に迷うて、可惜月日を夢現の境に過さんと。あはれ南無八幡大菩薩も照覽あれ、瀧口時頼が武士の魂の曇なき證據、眞此の通り」と、床なる一刀スラリと抜きて、青燈の光に差し付くれば、爛々たる水の刃に水も滴らんず無反の切先、鏢を銜んで紫雲の如く立上る焼刃の匂ひ目も覺むるばかり。打ち見やりて時頼莞爾と打ち笑み、二振三振、不圖平見に映る我が顔見れば、こはいかに、肉落ち色蒼白く、ありし昔に似もつかぬ悲慘の容貌。打ち駭きて、ためつ、すがめつ、見れば見るほど變り果てし面影は我ならで外になし。扱も寔れたるかな、愧しや我を知られる人は斯かる容を何とから見けん、そも斯くまで骨身をいためし哀れを思へば、深きは我ながら程知らず、是も誰が爲め、思へば無情の人心かな。碎けよと握り詰めたる柄も氣も何時しか緩みて、臥蠶の太眉閃々と動きて、覺えず「あゝ」

と太息つけば、霞む刃に心も曇り、映るは我面ならで、烟の如き横笛が舞姿。是はとばかり眼を閉ぢ、氣を取り直し、鏢音高く刃を鞘に納むれば、跡には燈の影ほの暗く、障子に映る影さびし。

嗚呼々々、六尺の體に人並みの膽は有りながら、さりとて腑甲斐なき我身かな。影も形もなき妄念に惱まされて、しらで過ぎし日はまだしもなれ、迷ひの夢の醒果てし今はの際に、めめしき未練は、あはれ武士ぞと言ひ得べきか。輕しと啣ちし三尺二寸、雙腕かけて疊みしはそも何の爲の極意なりしぞ。祖先の苦勞を忘れて風流三昧に現を抜かず當世武士を尻目にかければ、半蔵前の我は今何處にあるぞ。武骨者と人の笑ふを心に誇りし齋藤時頼に、あはれ今無念の涙は一滴も残らずや。そもや瀧口が此身は空蟬のもぬけの殻にて、腐れしまでも昔の膽の一片も残らぬか。

世に畏るべき敵に遇はざりし瀧口も、戀てふ魔神には引く弓もなきに呆れはてぬ。無念と思へば心愈々亂れ、心愈々亂るゝに隨れて、亂脈打てる胸の中に迷ひの雲は愈々擴がり、果は狂氣の如くいらちて、時ならぬ鳴弦の響、劍撃の聲に胸中の渾沌を清さんと務むれども、心技にあらざれば見れども見えず、聞けども聞えず、命の蔭に蹣跚る一念の戀は、玉の緒ならで斷たん術もなし。

誠や、戀に迷へる者は猶ほ底なき泥中に陥れるが如し。一寸上に浮べんとするは、一寸下に

沈むなり、一尺岸に上らんとするは、一尺底に下るなり、所詮自ら掘れる墳墓に埋るゝ運命は、悶え苦みて些の益もなし。されば悟れるとは己れが迷を知ることにして、そを脱せるの謂にはあらず。哀れ、戀の鳩毒を渣も残さず飲み干せる瀧口は、只々坐して致命の時を待つの外なからん。

第八

消えわびん露の命を、何にかけてや繋ぐらんと思ひきや、四五日経て瀧口が顔に憂の色漸く去りて、今までの如く物につけ事に觸れ、思ひ煩ふ様も見えず、胸の嵐はしらねども、表面は槓の梢のさらとも鳴らさず、何者か失意の戀にかへて其心を慰むるものあればならん。

一日、瀧口は父なる左衛門に向ひ、「父上に事改めて御願ひ致し度き一義あり」。左衛門「何事ぞ」と問へば、「斯かる事、我口より申すは如何なるものなれども、二十を越えてはや三歳にもなりたれば、家に洒掃の妻なくては萬に事缺けて快からず、幸ひ時頼見定め置きし女子有れば、父上より改めて婚禮を御取計らひ下されたく、願ひと言ふは此事に候」。人傳てに名を聞きてさへ愧らふべき初妻が事、顔赤らめもせず、落付き拂ひし語の言ひ様、仔細ありげなり。左衛門笑ひながら、「これは異な願ひを聞くものかな、晚かれ早かれ、いづれ持たねばならぬ妻なれば、相應はしき縁もあらばと、老父も疾くより心懸け居りしぞ。シテ其方が見定め置き

し女子とは、何れの御内か、但しは御一門にてもあるや、どうぢや。「小子が申せし女子は、然る門地ある者ならず」。「然らばいかなる身分の者ぞ、衛府附の侍にてもあるか」。「否、さるものには候はず、御所の曹司に横笛と申すもの、聞けば御室わたりの郷家の娘なりとの事」。

瀧口が顔は少しく青ざめて、思ひ定めし眼の色徒ならず。父は暫し語なく俯ける我子の顔を凝視め居しが、「時頼、そは正氣の言葉か」。「小子が一生の願ひ、神以て詐りならず」。左衛門は兩手を膝に置き直して聲勵まし、「やよ時頼、言ふまでもなき事なれど、婚姻は一生の大事と言ふこと、其方知らぬ事はあるまじ。世にも人にも知られたる然るべき人の娘を嫁子にもなし、其方が出世をも心安うせんと、日頃より心を用ゆる父を其方は何と見つるぞ。よしなき者に心を懸けて、家の譽をも顧みぬほど、無分別の其方にてはなかりしに、扱は豫てより人の噂に違はず、横笛とやらの色に迷ひしよな」。「否、小子こと色に迷はず、香にも酔はず、神以て戀でもなく浮氣でもなし、只と少しく心に誓ひし仔細の候へば」。

左衛門は少しく色を起し、「黙れ時頼、父の耳目を欺かん其の語、先頃其方が齋籠の足助の二郎殿、年若きにも似ず、其方が横笛に想ひを懸け居ること、後の爲ならずと懇に潜かに我に告げ呉れしが、其方に限りて浮きたる事のあるべきとも思はれねば、心も措かか過ぎ来りしが、思へば父が庇蔭目の過ちなりし。神以て戀にあ

らずとは何處まで此父を袖になきんずる心ぞ、不埒者め。話にも聞きつらん、祖先兵衛直頼殿、餘五將軍に仕へて拔群の譽を顯はせしこのかた、弓矢の前には後れを取らぬ齋藤の血統に、女色に魂を奪はれし未練者は其方が初めぞ。それにても武門の恥と心付かぬか、弓矢の手に面目なしとは思はずか。同じくば名ある武士の末にてもあらばいざしらず、素性もなき土民郷家の娘に、茂頼斯くて在らん内は、齋藤の門をくぐらせん事思ひも寄らず」。

老の一徹短慮に息巻き荒く罵れば、時頼は默然として只と差俯けるのみ。や、ありて、左衛門は少しく面を和らげて、「いかに時頼、人若き間は皆過ちはあるものぞ、萌え出づる時の美はしさに、霜枯の衰れは見えねども、何れか秋に遭はば果つべき。花の盛りは僅に三日にして、跡の青葉は何れも色同じ、あでやかなる女子の色も十年はよも續かぬものぞ、老いての後に顧れば、色めづる若き時の心の我ながら解らぬほど癡けたるものなるぞ。過ちは改むるに憚る勿れとは古哲の金言、父が言葉腑に落ちたるか、横笛が事思ひ切りたるか。時頼、返事のなきは不承知か」。

今まで眼を閉ぢて黙然たりし瀧口は、やうやく首を擡げて父が顔を見上げしが、兩眼は潤ひて無限の情を湛へ、満面に顯はせる悲哀の裡に揺がぬ決心を示し、徐ろに兩手をつきて、「一道理ある御仰、横笛が事、只今限り刀にかけて思ひ切つて候、其の代りに時頼が又の願ひ、

御開届下さるべきや」。左衛門は然もありなんど打黙頭き、「それでこそ茂頼が悴、早速の分別、父も安堵したるぞ、此上の願とは何事ぞ」。「今日より永のおん暇を給はりたし」。言ひ終るや、堰止めかねし溜涙、はらりと流しぬ。

第九

天にも地にも意外の一言に、左衛門呆れて口も開かず、只と其子の顔色打ち聆れば、瀧口は徐ろに涙を拂ひ、「思ひの外なる御驚きに定めて浮の空とも思はれんが、此願ひこそは時頼が此座の出来心にては露候はず、斯かる曉にはと豫てより思決めし事に候。事の仔細を申さば、只と御心に違ふのみなるべけれども、申さざれば猶ほ以て亂心の沙汰とも思召されん。申すも思はゆげなる横笛が事、まこと言ひ交せし事だになけれども、我のみの哀れは中々に深さの程こそ知れぬ、つれなき人の心に猶更ら狂ふ心の駒を繋がむ手綱もなく、此の春秋は我身ながら辛かりし。神かけて戀に非ず、迷に非ずと我は思へども、人には浮氣と見えもしけん。唯と劍に切らん影もなく、弓もやて射んものなき心の敵に向ひて、そも幾その苦戦をなせしやは、父上、此の顔容のやつれたるにて御推量下されたし。時頼が六尺の體によくも擔ひしと自らすら駭く計りなる積りし憂事の數、我ならで外に知る人もなく、只と戀の奴よ、心弱者よと世上の人に歌はれん残念さ、誰れに向つて推量あれとも言はん人なきこそ、返す返すも口惜し

けれ。此儘の身にては、どの顔下げて武士よと人に呼ばるべき、腐れし心を抱きて、外見ばかりの伊達に指さん事、兩刀の曇なき手前に心とがめて我から忍びず、只此上は横笛に表向き婚姻を申入るゝ外なし、されどつれなき人心、今更靡かん様もなく、且や素性賤しき女子なれば、物堅き父上の御容しなき事元より覺悟候ひしが、只最後の思出にお耳を汚したるまでなりき、所詮天魔に魅入れし我身の定業と思へば、心を煩はすもの更になし。今は小子が胸には横笛がつけなき心も残らず、月日と共に積りし哀れも宿さず、人の恨みも我が愛しきも洗ひし如く痕なけれども、残るは只此世の無常にして頼み少きこと、秋風の身にしみじみと感じて有漏の身の換へ難き恨み、今更骨身に徹へ候。惟れば誰が保ちけん東父西母が命、誰が嘗めたりし不老不死の藥、電光の裏に假の生を寄せて、妄念の間に露の命を苦しむ、愚なりし我身なりけり。横笛が事、御容しなきこと小子に取りては此上もなき善知識。今日を限りに世を厭ひて誠の道に入り、墨染の衣に一生を送りたき小子が決心。二十餘年の御恩の程は申すも愚なれども、何れ遇れ得ぬ因果の道と御諦ありて、永の御暇を給はらんこと、時頼が今生の願に候。胸一杯の悲しみに語さへ震へ、語り了ると其儘、齒根喰ひ絞りて、詰と耐ゆる斷腸の思ひ、勇士の愁歎、流石にめしからず。

過ぎ越せし六十餘年の春秋、武門の外を人の住むべき世とも思はず、涙は無念の時出づるものぞと思ひし左衛門が耳に、哀れに優しき瀧口が述懐の、何として解かるべき。歌詠む人の方便とのみ思ひ居し戀に惱みしと言ふさへあるに、木の端とのみ嘲りし世捨人が現在我子の願ならんとは、左衛門如何でか驚かざるを得べき。夢かとはかり、一度は呆れ、一度は怒り、老の兩眼に溢るゝばかりの涙を浮べ、「やよ悴、今言ひしは儘に齋藤時頼が眞の言葉か、幼少より筋骨人に勝れて逞しく、膽力さへ坐りたる其方、行末の出世の程も頼母しく、我が白髮首の生甲斐あらん日をば、指折りながら待侘び居たるには引換へて、今と言ふ今、老の眼に思ひも寄らぬ恥辱を見るものかな。奇怪とや言はん、不思議とや言はん。慈悲深き小松殿が、左衛門は善き子を持たれし、と我を見給ふ度毎のお言葉を常々人に誇りし我れ、今更乞食坊主のお言葉を、いづこに人に合する二つの顔ありと思うてか。やよ、時頼、ヨツク聞け、他は言はず、先祖代々よりの齋藤一家が被りし平家の御恩はそも幾何なりと思へるぞ。殊に弱年の其方を那程に目をかけ給ふ小松殿の御恩に對しても、よし如何に堪へ難き理由あればとて、斯かる方外の事、言はれ得る義理か。弓矢の上こそ武士の譽はあれ、兩刀捨てて世を捨てて、悟り顔なる悴を左衛門は持たざるぞ。上氣の沙汰ならば容赦もせん、性根を据えて、不所存のほど過つたと言はぬかツ」。兩の拳を握りて、怒りの眼は鋭けれども、恩愛の涙は忍ばれず、雙頬傳うてはふり落つるを拭ひもやらず、一息つよく、

第十

「どうぢや、時頼、返答せぬかツ」。

深く思ひ決めし瀧口が一念は、石にあらねば轉ばすべくもあらざれども、忠と孝との二道に恩義をからみし父の言葉。思ひ設けし事ながら、今更に腸も千切るゝばかり、聲も涙に曇りて、見上ぐる父の顔も定かならず、「仰せらるゝ事、時頼いかで理と承らざるべき。小松殿の御事は云ふも更なり、年寄り給ひたる父上に、斯かる嘆を見せ參らす小子が胸の苦しきは喩ふるに物もなければ、所詮浮世と觀じては、一切の望に離れし我心、今は返さん術もなし、忠孝の道、君父の恩、時頼何として疎かに存じ候べき。然りながら、一度人身を失へば萬劫還らずとかや、世を換へ生を移しても、生死妄念を離れざる身と思へば、悟の日の晩かりしに心急かされて、世は是れ迄とこそ思はれ候へ。只是れまで思ひ決めしまで重ね重ね幾重の思案をば、御知りなき父上には、定めて若氣の短慮とも、當座の上氣とも聞かれつらんこそ口惜しけれ、言はば一生の浮沈に關る大事、時頼不肖ながらいかでか等閑に思ひ候べき。詮ずるに自他の悲しみを此胸一つに収め置きて、亡らん後の世まで知る人もなき身の果敢なき、今更是非もなし。父上、願ふは此世の縁を是限り、時頼が身は二十三年の秋を一期に病の爲に敢なくなりしとも御諦め下されかし。不孝の悲しみは胸一つには堪へざれども、御詫申さんに辭もなし、只